

＜最優秀賞＞ 三宅 健士朗

映画の評価は観客にとって実はとても難しいものだ。

映画には無数のテーマや題材、そして尽きることない表現がある。作り手は公開を終えるまで、評価があるのかないのかすら分らないが、観客も自身の解釈や素直な感情が、独特で逸脱していないか不安があり、躊躇しながら発している。当たり前に行われているようにみえて、映画の評価はそんな繊細なバランスのもとに存在しているのかもしれない。

そんな中で、紛うことなく確かな評価を獲得したパラサイトが、世界で広く受けとめられた理由、いわば「公約数」が何だったのか考えてみたい。

ストーリーはもはや語るまでもない、豪邸に住まう裕福なパク家を巢食う、半地下に住む貧しいキム家を描いたコメディタッチのサスペンスだ。

一つひとつみていくと、表現を確立した監督による洗練された脚本や映像の美しさ、緊張感を与え続ける音楽、ベテラン俳優陣の演技、その全てにおいて完成度の高さが評価されている。何より韓国の社会だけに留まらない経済社会全体が避けることが出来ない「格差」という本質的な課題が捨象され、滑稽に描かれたことで時流の中で選ばれる映画となったのだろう。しかしそうであればポン・ジュノ作品には本格的なサスペンスを痛烈な社会風刺で挑んだ「殺人の追憶」（2003年）があり、ハリウッドレベルの壮大なスケールで大資本を批判した「Okja」（2017）などもあったはずだ。

では本作は何が違うのだろうか。私は、この映画の多くの秀でた側面を観客が一度に咀嚼したのではなく、それら全てが見事に詰め込まれたエンターテインメントとして受け入れたのではないかと思う。見慣れないが魅力に溢れた二つの家族の姿にはじまり、次々にずる賢い考えでパク家に取り入っていく展開に心躍り、突然訪れる衝撃的な結末、そして余韻を残すエピローグに日常では味わえない不思議な感情を得る。まさにエンターテインメントとして理想的な映画体験を誰もが享受したのではないか。

パラサイトは全てを皮肉する。学歴も、芸術も、富も名誉も、愛も、築き上げられ守られ続けた何物も。そこに巢食うものが現れれば、如何に脆いものであるか。まるで永遠の幸福などないというニヒルさを感じさせるが、同時に生への渴望を賛美するようなメッセージもある。作り手が切々とせず皮肉を込めたコメディを楽しんだことで生み出されたエンターテインメント性こそ本作の評価における最大公約数ではないだろうか。

パラサイトという一つのエンターテインメントが大衆から業界まで世界中で広く評価されたことで、社会のマジョリティがどこにあるか、改めて示されただろう。この世界のあらゆる、国民に立脚していることを標榜する社会において、我々が見失いかけていたマジョリティがこの映画に確かにあることを、この映画と観客は教えてくれたのだ。

＜優秀賞＞ 中村 憲一

現代韓国的一面（経済格差、受験戦争、若者の失業率の高さ、IT先進国など）を見事にドラマ化し、リアルにしかもユーモアを交えた映像に酔いしれた。ファーストシーンで半地下に生活する家族を描写し、害虫駆除の清掃車が白い煙をまき散らしながらやってくる導入部の巧みさに、30年近く前に韓国で2年間くらしした折のことが思い出され、引き込まれていた。

映画で取り上げられていたテーマは随分前から指摘されていたが、現在はさらにその度合いが深刻さを増しているようである。映画はこれらの問題を二つの家族の中に凝縮し、それを分かりやすい物語に作り上げた。社会から落ちこぼれた家族が半地下に暮らすというシナリオも分かりやすいだけでなく、象徴的な意味合いを持たせている。半地下の家族が寄生する側であるとすれば、一方寄生される側が高台の豪邸に暮らす家族であるということも対照的で納得しやすい。

半地下の家族が高台の家族に寄生する契機が受験戦争と言われるほど厳しい受験競争に大きく関わっていることも、現実を踏まえている。リアリティがあるから、半地下の家族と高台の家族を繋ぐ最初の役割を果たすのが家庭教師という設定も自然にみえる。しかも豪邸で家庭教師をしていた学生が米国留学のために、大学受験に失敗したフリーターの友達を紹介するという設定も、受験競争の勝者と敗者の関係を韓国の人間関係の濃密さの中に描写して説得力がある。

さらに、物語はスリリングに展開していくが、半地下の家族全員が高台の家族に寄生できたと思われるところで、さらなる展開が社会の深みへといざなう。それは単におちこぼれた半地下の家族だけが高台の家族に寄生しようとしているのではなく、すでに落ちこぼれた中間層の人々も何とかより良い明日を求めて懸命に生きていることを、高台の豪邸の家政婦の実態が明らかになることでショッキングに理解させられる。

物語は意外な展開を迎えてエンディングに進んでいくが、その決定的な要因でもあり、この物語に深いリアリティを与えているのが匂いであることも秀逸である。半地下家族の失業中の父親が高台の豪邸の専属運転手になり、主人から車の乗り降りに軽く“異臭”を指摘される。この半地下家族の父親を演じたソン・ガンホが異臭を指摘され、さらにすぐ後のシーンでその原因を理解して愕然とする演技は見事と言う他はない。

今を生きる韓国人をこのような物語の中に象徴的にごく自然に、造形したスタッフとキャストの力量に拍手を送りたい。このような映画に出会えたことを心から嬉しく思っている。今から41年前、東京池袋のサンシャインシティにあった韓国文化院で初めて観た韓国映画「ピョンテとヨンジャ」に感銘を受け、韓国人に親しみを覚えた。そして韓国関係の仕事を行こうと決心した。あの時と同じように、「パラサイト」を観て、現在の韓国社会をもう少し深く知りたいと思った。

＜優秀賞＞ 安田 花

映画館に足を踏み入れた途端、すかさず目に飛び込んだ映画「パラサイト」のポスター。

目を黒く塗られた家族、パラサイト「寄生虫」という名のタイトルに足が遠のくどころか何か不思議に惹きつけられるように、そのポスターの目の前に私は立っていた。背筋に冷たい汗を感じながらもそれと同時にたしかにそのポスターとタイトルに興味惹かれる自分がいた。

主人公の家族はその名の通り、半分地下にある家に住んでいる。仕事がなく、日々の食事のままならず内職の仕事でやっと生活が成り立っているその家族は、私が知るドラマで見た韓国とは大きくかけ離れていた。可愛い制服を着て、韓国の美しい街並みを闊歩する上流階級の主人公は出てこない。服装にお金をかけることもできず、湿気の多い日光の当たりにくい家で、そのようなキラキラした人々を妬ましく思い、のし上がる日を思い描く下層階級の人々こそが、この映画の主人公だ。パラサイトは下層階級・上流階級二つの世界を半地下と地上で区別し、象徴的に描いている。

パラサイトの魅力はこのように韓国の身分社会を隠すことなく表現している点にある。

半地下の家族はいわゆる低階級で毎日生きることと精一杯の日々を送る。家族一人一人が誰にも負けない才能を持っているのにも拘らず、生まれた環境が悪ければそこから抜け出すことはできない。格差の連鎖は循環し、ずっと続いてく。どんなにもがいても人生はそうは上手くいかないことを如実に表しているのだ。また、半地下に住む低階級の家族、山の手の上流階級の家族、彼ら家の立地が比べられるように映画では頻繁に出てくる。その立地こそが身分の違いを間接的に表していると思う。パラサイトで非常に印象的なシーンは終盤の激しい大雨が降り、下層階級の住宅地に鉄砲水が押し寄せる場面。半地下の家族やその近所の住人のほとんどが一夜の雨にして家を失い悲しみに暮れる中、かたや上流階級の家族はそんなことが起こったとは知らず呑気とも言える態度で誕生日会をやろうと言う。この雨が身分の差を象徴していると思う。社会においても、家においても、最初に犠牲なるのは低階級であり、それが現実であることをこの場面で物語っている。

私は、パラサイトで韓国のある低階級の家族、上流階級の家族を見て世界の縮図を垣間見た気がした。どんな国にでも貧しい人や富裕層の人々がいる。同じ街に暮らしていて、同じ言語で話しているのに、彼らはお互いを全く違う人種として扱っている。こんな光景がどこの国にも当たり前のよう存在する。我が日本であっても、どんな先進国であってもその現実を変えることができない。だからこそ、パラサイトは世界の国々から称賛を受けたのだ。

韓国の光と影のある家庭に焦点を当てて、巧みな映像技術や細かい描写、役者の表情一つ一つから感じられるパラサイトは今を生きる私たちが見なければいけない映画だと思う。

＜奨励賞＞ 大塚 深冬

『寄生、共生、多様性』

心臓をわしづかみにされた。そんな衝撃でした。

全く予測できなかったストーリー展開、美しくリアルな映像、匂うほどに生々しい人間の姿。完璧に圧倒されてしまった私は、鑑賞後すぐに声がでないほどの衝撃を受けました。「え、今なに観たの?」「この複雑な感情は?」と、感想がなかなか言葉にできませんでしたが、長い時間をかけて見つけた「寄生」「共生」「多様性」という言葉で振り返ります。

格差は世界の共通課題

この映画では資本主義社会の格差問題が扱われます。監督のポン・ジュノ氏もあるインタビューで「世界のほとんどの国は今、資本主義という一つの時代を生きています」と話しています。格差をテーマにした映画自体が珍しいわけではありませんが、韓国固有の格差問題を描いたこの映画が世界中で賞賛された事実は、半地下が存在するしないにかかわらず、格差が今の世界の共通課題であることを私に教えてくれました。

「寄生」から「共生」へ

原題の『기생충』は「寄生虫」という漢字を韓国語表記にしたものです。貧しい家族が裕福な家庭に「寄生」する様子が描かれるのですが、裕福な家庭も貧しい家族に「寄生」する模様を描く点が魅力と思いました。

「寄生」は、一文字変えると「共生」になります。言葉は一文字変えるだけ。では、社会は何を変えれば良いのだろう。寄生ではなく共生の可能性を探りたいと私に思わせてくれた作品です。

多様性を受け入れ、拡大する

「多様性」というキーワードを思いついたのは、この作品が標準労働契約を順守して製作されたと知った時です。映画製作スタッフの低賃金や長時間労働が問題となる韓国で、保険への加入や超過勤務手当支給などが盛り込まれた労働契約書を順守して世界的なヒット作がうまれたことは、韓国映画界の未来に安全と希望を届けるニュースと思いました。

“外国語映画”の快挙

そして、『パラサイト』が第92回アカデミー賞で作品賞を含む4つの栄冠に輝いたことにも着目しました。作品賞とは、その年のアメリカで上映された最も優れた作品という名誉で、“アメリカにとっての外国語”映画が受賞したことは初めて、まさに歴史的快挙です。

この快挙を語る上で忘れてはいけないのは、近年アカデミー賞が多様性の欠落や白人偏重が指摘されてきた点です。アカデミー賞は自らの課題解決のために外国語映画に作品賞を与えたという見解もできるかもしれませんが、私が注目したいのは、たった一本の韓国映画がアメリカ映画産業に投じた石の影響力です。自国と外国、自分と相手、その間にある境界線を再考する“象徴石”のような役割を果たしている点です。

パラサイトに寄生されて

韓国の、日本の、アメリカの、世界中の映画史に名を刻んだ『パラサイト』。この映画は私に共生と多様性の可能性を照らしてくれた映画であり、私の心臓をわしづかんで、これからも私に寄生する映画です。

＜奨励賞＞ 前村 克己

この映画は「格差社会への痛烈な批判の映画」として語られることが多いですが、私は本作を見終わった後、それに軽い違和感を覚えてしまいました。確かに主人公達は半地下で貧困生活にあえいでいますが、長男は家庭教師ができるだけの知性を持ち、次女もカウンセラーとしてそれなりの仕事ができます。職種を選ばず仕事を探せば、すぐに今の生活から抜け出せそうです。しかし彼らはそういった泥臭い仕事をすることを拒否しています。それは彼らが昔はそれなりの暮らしをしていて、今は半地下にいても、自分たちは、こんなところで生活するようなレベルの人間ではないという強烈なプライドがあるからだと思うのです。だから社長の家の仕事には積極的に取り組み、その家族に組み込まれることで本来の自分たちがいるべき世界はここなのだ、こここそ自分たちの本来のすみかと感じて、プライドも満たされていたに違いありません。

だから社長が下層の人間には生来身についた、どうしても取れない臭いがあると言ったことを異常に気にして、ごしごし体を洗ったりしてしまうのです、その思いが徐々に積もっていったラストの社長が鼻を摘みながら鍵をとる行為で爆発したのだと思うのです。つまりこの映画は、彼らの虚構のプライドが徐々に傷つけられてゆき、遂には崩壊して爆発する映画であると思いました。

また、この映画が秀逸なのは、前半は社長一家に取り入る過程を描いて軽妙な笑いの連続なのに、中盤の本当にその家の地下に住み着いていた男の登場から、笑いの中に陰惨なトーンを帯びてき、ついには悲劇を迎えてしまうというラストまでのトーンの自然な変化の部分だと思いました。

半地下と本当の地下の男との争いは、本来は貧乏人同士手を取り合って金持ちに立ち向かうべきなのに、お互いの醜い姿をさらけ出しながらのエゴな争いを繰り広げてしまう、それは今の社会の人々が本来自分たちを苦しめているものとは闘わずに、自分たちの小さな利益だけを目指して互いに足を引っ張り合っていることへの痛烈な皮肉だと思いました。その様子はまるで自分のことだけを考えて地獄へ落ちた杜子春を思わせるようでした。

アカデミー賞の授賞式の様子をテレビで見たのですが 見たことのないダンディな俳優さんがいて誰だろうと思っていたら、社長の家の地下室の住人を怪演していたパク・ミョンフンサンだったのには驚きました。本当はダンディな人だったのですね。

確かに「パラサイト」は良い映画ですが、韓国映画には他にも良い映画がたくさんあると思います。たとえば「母なる証明」、「コインロッカーの女」、「僕が9歳だったころ」など書ききれないほどです。この映画の影響で日本国内でも韓国映画に興味を持つ人が増えて、もっと国内でも韓国映画が見られるようになれば良いなと思いました。

＜奨励賞＞ 中嶋 朋子

何という後味の悪さだろうか。いや、後味の悪さというよりも納得が行かない歯がゆさ、他人には見られたくない部分を覗き見されるような後ろめたさ、あるいは自分では全く気がついていない汚点を赤の他人に、それも突然指摘されるような憤懣。これほどの感情を一度に突きつけられる映画に、私は今まで出会ったことがあるだろうか。

多くの親韓日本人と同様、私も多くの韓国ドラマを観るうちに「こんなにドラマが面白いのだから、映画も観てみよう。」それが韓国映画を観るきっかけであり、出会いであった。マニアとまでは行かないが、結構な数の韓国映画を今までに観てきた。どちらかと言えば娯楽性の高い作品、また鑑賞後、涙が止まらなくなる感動作品が多かった。

「パラサイト半地下の家族」は、ポン・ジュノ監督作品という話題性もあったが、何よりも社会の格差というキーワードに引っかかったという方が、私の関心には近いように思う。

「格差」という言葉は日本・韓国を問わず現代社会の大きなキーワードである。学歴・貧富・教育のみならず、情報のスピードの速い現社会においては誰かが誰かと、自分と比較せざるを得なくなり、目に見えない劣等感や、あるいは優越感を心の中に蓄積させて行く。見える「格差」見えない「格差」により、がんじがらめにされている私たち。

「パラサイト半地下の家族」に登場する人物たちの設定はあからさまな格差である。これでもかというほどの貧困・不遇と、対して富者としての環境と贅沢という、目に見えて判りやすい格差のシチュエーションのもとで紡がれていくストーリーに私たちは絡めとられて行ったのではないだろうかと思う。

富者パク家にパラサイトしていくキム一家のチームワークに、ある小気味よさを楽しみながら、半地下ならぬ存在さえも知らされない地下に潜む人物の登場に驚きながら、少しも心が休まらない展開に、私は翻弄されていた。どの場面もインパクトが強かった。セリフの数も決して多い訳ではなく、普通の会話が流れているのに、妙に印象的だった。おそらく、俳優の表情や顔つきがセリフ以上のことを語っていたのだ。パク夫人ヨンギョがキャンプを中止して真夜中に帰宅し、家政婦であるチュンスクに食事の支度をさせる場面では、ねぎらいの言葉もなく、ひたすら食べる彼女の顔つきには無自覚の傲慢さが滲み出ているのではないか。

半地下の家族のたどりつく先はどこにあるのだろうか。あのあからさまな格差の設定は何ら変化することなく、この物語は終わってしまった。

何という後味の悪さだろうか。私のこの気持ちのたどりつく先ははたしてあるのだろうか。私にこれほどの感情を一度に突きつける映画作品にこれから先、出会うことがあるだろうか。

＜奨励賞＞ 本名 愛子

昔、仁寺洞の骨董店で見かけた木彫りの素朴な人形を思いだした。

モグと呼ばれた人形は、両班と庶民の違いを木の彫り方によって現していると言う。ユーモラスさを含むおどけた人形たちが、遥か遠い朝鮮時代から認知されていることに、隣国の死者を弔う深い懷を彷彿させる。

高台の瀟洒な家は、選ばれた人が集う世界であり、富の象徴である。

臭いがまとわりつく半地下に住む家族たちは、その日暮らしが染みている人たち。才能を活かせられず、それらの状況の中でも、卑屈になることなく、結束力と共助で、たくましく生きている。貧困というキーワードの中で、家族同士仲が良いというのは、揺るぎ無い結束の何物でもない。よって、それぞれの役割が分担化され続ける課程は、偶然が必然と変わり、歪んだ家族の実像に変わっていく。

拝金主義者が揶揄されながらも、格差を生む現代社会に不公平感を感じるのは、自然な感情であろう。よって、関わることがありえない豪邸に足を踏み入れた瞬間、垂直な階層を行き来する階段の昇降によって、天国と地獄を体感したのだ。

半地下の家族たちも、豪邸の地下に潜んで暮らしていた家族たちも、先の見えない現実、蜘蛛が幾重に垂れ下がった糸のように、必死にへばりついていったような気がする。キム一家という裕福な一家に寄生したかったのではなく、置かれている現実から抜け出せる方法を、あらゆる知恵とエネルギーに変えて放出したのだ。但し、歪んだシナリオは、誤算が生み出した壮絶な結末となって、元の場所に家族たちは、戻っていくのだ。これらは、過酷な苦しさを負っていく家族たちへの新たな重石となり、現実を淡々と受け入れるしか術がないように思える。

裕福と貧困が、ルーレットのように順番に回りかねない現実、これらが、縮まることは、ありえないのが現実だ。例えば、自分基準を比較対象にして、一喜一憂する事もありえる。ただ、物質主義を第一という考え方や、目に見えるものが絶対的という偏った考え方には、違和感をともなう。その差異について、私自身、培ってきた幸福の尺度が、様々な経験の蓄積上の価値観としかいいようがないけれど。

そういえば、モグという人形は、棺に飾る装飾品だと言われる。人形一体にでも、両班と庶民で格差が顕著に現われているが、愉快的ポーズや、大らかな表情は、死者が寂しがらないようにするための配慮だとも聞いた。身分や格差など、黄泉の国への旅立ちには、何の価値も持たないのだ。祈りを込めた当時の人々の素朴な心情を思うと、豊かであるはずのグローバル化された利便性の高い現代が、実は、薄い紙一枚の世界で繋がっている脆ささえ感じてしまう。

二極化されつつある現実、「あなたは何に寄生するのか」という、強いメッセージを突き付けられた一本である。

＜奨励賞＞ 青木 綾香

私がこの映画を観た理由は、流行に乗り遅れないようにするための軽い興味本位からであった。軽い気持ちで観たつもりだったが、私の人生観に大きな衝撃と影響を与える映画の一つとなった。映画には、現代に生きる私たちがこれからの社会において目を背けてはならないような、生々しい現実が多く描かれていた。

私が考えるこの映画のテーマは「格差社会」についてである。中でも、私が映画を観ながら最も印象的に感じたのは、階段などの段差や坂道などをうまく利用した上下を強調するような演出が多いということである。半地下という韓国特有の居住環境で暮らす主人公一家のシーンから始まるが、家から見える景色が人々の足元であることやトイレが人間の暮らす位置よりも高いところにあることなどから、主人公一家が一般階級の人々よりも下の階級に属していることが強調されているように感じた。主人公は上層階級であるパク家と出会い、主人公一家はそれぞれが持っている能力を発揮することで寄生虫のようにパク家に住み着いていくようになるが、この場面でも、能力だけでは上層階級になりきれない現代社会が表現されているように感じた。主人公にとって大きな転機の一つとなったのは、パク家の地下に住む男との出会った場面であったと感じた。その男との出会いにより、それまで自分たちよりも上にいる人々を見上げてばかりであった主人公が、自分たちよりも下の階級に属する人々もいるということを知ることになったのである。地下に住む男の存在を知った頃から主人公の笑顔が無くなっていったのは、無意識にその男を見下している自分に気づいたことで、今まで見て見ぬふりをしてきた「格差差別」を目の当たりにし、自分たちも差別の対象になり得るということを認識したからなのではないだろうか。

また、映画の終盤にあるパーティーでの殺害事件の場面でも、「格差社会」の現実を感じることができた。私たちは、自分が属する位置から手の届かないような階級にある人やモノに対して、憧れに似た感情を抱くことはあっても憎悪のような感情は抱きにくい。しかし、あと少しで手が届きそうな位置にあるものには、ただの憧れよりも憎しみや妬みを感じやすい傾向にあると思う。地下に住む男が上層階級であるパク家の主人に対してはリスペクトの気持ちを表していたにも関わらず、主人公の子供たちを殺害したことや、自分の子供が目の前で殺害されたにも関わらず、殺害した犯人ではなくパク家の主人を殺害したことなどは、人間が持つこのような感情たちを「格差社会」とうまく絡めて表現しているように感じた。

この映画を観てから、自分が無意識のうちに他人に対して行っているかもしれない、または、受けているのかもしれない差別のことを考えるようになった。大人たちが目を背けがちな「格差社会」という問題に対して、私たちの世代がしっかりと向き合っていくべきだ考えるようになった。